

2012年度二年課程2年卒業勉強

## 東日本大震災を考える

### -自由学園における最高学部の支援活動を

#### 持続可能にするためには-

メンバー：久保田悠 小林美奈 西島久璃子 山本千尋

指導教員：小田幸子

アドバイザー：咲花昭嗣 夏井正明

2011年3月11日に発生した東日本大震災（以下3.11という）に対する自由学園、特に最高学部の支援活動を更に有意義な活動にしたいと考え、活動内容や組織・記録体制について見直しを行った。

今後の支援活動を考えるに当たり、まず3.11以降自由学園および関連団体が行った支援活動の調査、また創立当初から行ってきたいいくつかの支援活動の振り返りと、創立者の考えを再確認した。また3.11以降時間と共に変化している現地のニーズを知るために、現地で聞き取り調査を行った。同時に、学生・東日本震災救援活動センター（以下SKC）へのアンケート調査などを通して、現在の支援活動の問題点を具体的にまとめ、その改善案を提示し、支援グループと共に今後の支援活動の方向性の検討を行なった。

#### 1. 卒業勉強の背景と目的

2011（平成23）年3月11日14時46分頃、三陸沖を震源地とする東北地方太平洋沖地震が発生した。

震災発生後の翌4月から、自由学園（以下学園）は、創立者を同じくする婦人之友社・全国友の会の三団体で協力して支援活動を継続してきた。学園では初等部・男子部・女子部・最高学部（以下学部）がそれぞれで支援活動を行っている。学部では有志の学生5、6名と引率教職員が盛岡友の会と共に月1回、岩手県釜石市・大槌町での活動を継続している。

私たちは女子部高等科3年在学中に3.11を体験した。この体験から、支援活動について強い関心を持つようになり、学部進学後、それぞれが学部での支援活動に参加し、更に「何か出来ないだろうか」と考えるようになった。

一方で、学部の支援活動について様々な点において疑問を持った。それは、「3.11から1年が過ぎたが、被災地の現状を把握し、それに即した支援活動が出来ているのか」「支援活動に行く学生がなかなか集まらないという現状で、このまま活動を継続させられるのか」「今までの活動記録はきちんとされているのか」などである。

今後の支援活動を現地の方々にとって、よりよい形で続けられるようにするために、以上の疑問点について明らかにし、学部における支援活動がどのようにあったらよいか、ということ卒業勉強として取り上げたいと思い、今年度のテーマとした。

#### 卒業勉強の目的

- 1) 自由学園の支援活動を今後も継続していく上で、自分たちが出来ることは何かを考え、「学生・生徒が主体性」をもって持続可能な支援活動を行なうために、具体的な内容を提案し、可能な限り実行する
- 2) 過去の支援活動の記録が十分でなかったことを受け、資料室と連携しながら、これからの支援活動の記録を強化させる
- 3) 卒業しても今後の復興に向けて、個人として震災に関わっていく際に必要な知識を得る

また、同時に「この卒業勉強が今一度“3.11”について考えるきっかけになることを望む」という願いがある。

3.11から約2年が経とうとしているが、報道機関による震災関連の情報はほとんどなくなり、現地になくとも計画停電などで震災の爪痕を感じていた震災直後とは状況が変わってきている。しかし現地では、仮設住宅での不便な生活を余儀なくされている人達、災害によるがれき処理の問題、経済の問題、そして最も深刻な原子力発電所事故による放射能問題などが、未だに解決をみていない。現地の状況をまずは一人一人が知り、その上で3.11について考える契機にして欲しいと思った。

#### 2. 支援活動の現状と歴史

まず東日本大震災の概要と自由学園および関連団体の支援活動の現状について、また、今後の活動を考える上で自由学園が創立当初から行ってきたいいくつかの支援活動を振り返り、その根底にある創

立者羽仁もと子の考えを再確認した。

2011(平成23)年3月11日(金)14時46分23秒、東北地方を中心とする東日本の広い範囲で強い地震があり、宮城県で震度7(宮城県北部)を記録した。気象庁によると、震源は宮城県牡鹿半島の東南東沖の海底で、震源の深さは約10キロであった。地震の規模を示すマグニチュード(M)は9.0(日本気象庁が2011年3月13日に更新)で、これは、関東大震災の約45倍、阪神淡路大震災の約1,450倍にあたる国内観測史上最大の規模だった。この巨大地震により津波が発生したため、地震そのものによる被害に加え、津波によって多くの人命が奪われた。

また、地震により東京電力福島第1原子力発電所(福島県双葉郡双葉町、大熊町)、第2原子力発電所(同県双葉郡楢葉町、一部は富岡町)の計7基の原子炉が自動停止し、数十分後に、想定を遥かに超える高さ約13メートルの津波が両原発を襲った。敷地内のほぼ全域が浸水し、第1原発1、2号機で外部電源の供給がストップ、原子炉や使用済み燃料プールの冷却機能を失った。第1原発から半径3キロ以内の住民に避難、10キロ以内の屋内退避が指示された。震災翌日の12日には1号機で水素爆発が起こり、周辺の放射線量が上昇して避難区域が徐々に拡大された。1986年4月26日に発生したチェルノブイリでの原発事故と並ぶ世界最悪の「レベル7」とされ、この事故が重大であったことがわかる。

それに加え、各地で火災・液状化現象などの被害もあった。

この地震による被害は、2013年1月30日現在<sup>1</sup>によると、死者1万5,880人、行方不明者2,700人となっている。

### 3.11 直後の支援活動について

東日本大震災が発生した翌3月12日に「何かできることはないだろうか」という声が学生の中から上がり、有志の最高学部生が「支援グループ」という学生組織を結成し、被害が大きい東北への支援活動を始めた。これが、現在も継続されている最高学部の支援活動の基盤となった。

すぐに現地に行って支援活動をしたいという声もあったが、現時点で自分たちに出来ることはまず「募金活動」であると考え、教師会と話し合い、会計室の赤木博子さん(当時)に依頼し、学園の献金の口座に義捐金募金のための口座を開いた。

その後、ホームページへの掲載や、また各家庭に手

紙を送り、学園関係者から義捐金を募った。

一方3月22日には、婦人之友社・友の会・自由学園で「三団体・震災救援本部」が立ち上がった。

4月に入ってからは、被災者が避難していた埼玉スーパーアリーナに有志の学生と教員が訪れ、タッピングタッチ<sup>2</sup>を行ったり、男子部記念ホールで学園周辺の住民を対象にタッピングタッチ講習会も行った。また、パン工房職員と食糧部員で協力しコンコンブル2,000本を焼き上げ、包装・梱包した。そして4月6日から8日までの3日間にわたり、友の会中央部・婦人之友社・自由学園の代表3名が、釜石市・大槌町・山田町・仙台市・石巻市の被災地を訪問した。

その他にも、最高学部生と新卒業生の計9名が、SCF(学生キリスト教友愛協会)で募集していたボランティアに参加したことや、仙台友の会に送る婦人用エプロン製作が「支援グループ」のメンバーを中心に始まり、100着を製作し、全て包装・梱包して仙台友の会に届ける活動を行なった。

自由学園では「東日本震災救援活動センター(SKK)」という組織を立ち上げた。この組織は2012度末までの臨時組織であったが、現在も引き続き、運営されている。

そして、最高学部の現地での支援活動は2011年4月27日から5月2日の6日間を第1陣として始まった。

### 最高学部震災支援グループについて

**震災直後に結成された「支援グループ」が引き継がれ、現在「震災支援グループ」の名称で活動を行っている。**主な活動内容は、毎月1回の支援活動のメンバー募集、活動内容を現地の方々・友の会の方の要望を含めメンバーとグループで話し合い決定すること、活動後は記録を収集すること、次の活動メンバーへの引き継ぎの仲介になることなどである(2013年2月現在)。

### 最高学部生の支援活動について

#### 1) 現地での活動

最高学部としての組織的な現地での支援活動は、2011年4月27日から5月2日に行われた活動を第1陣として、2012年11月の第18陣まで継続的に行われてきた。毎月1回、5~6人の最高学部生有志と引率の教職員が岩手県釜石市・大槌町で6日間、盛岡友の会と共に現地で活動してきた。支援活動の内容は、震災直後から現在まで現地のニーズに

<sup>2</sup> 指先の腹のところを使って、軽く弾ませるように左右交互に優しくたたくことを基本としたホリスティック(統合的)でシンプルなケアの技法

<sup>1</sup> 朝日新聞による最新情報

合わせて徐々に変化してきた。被災後しばらくの間は、主に避難所での炊き出し、物資配布、被災住宅の掃除、仮設住宅用のれん付けなどを行った。当時は支援物資を無料で配布していたが、その後は「青空市」という形で各地の友の会などから送られた食器や衣類・食料品などを安価で物資を頒布してきた。

震災から1年が過ぎ、現地の生活も少しずつ落ち着きを見せるようになってきた中で、活動の内容も仮設住宅訪問、学童クラブでの学習の手伝い、子供会、盛岡友の会主催の「お茶っこと手仕事の会」のお手伝いなどを主とする交流活動が多くなってきている。

## 2) 後方支援活動

毎月1回の現地での活動と平行して、後方支援活動（現地に行かなくても出来る支援活動）も行っている。最高学部では2011年度は、婦人用エプロン作り、新入学児童のための袋物作成、牛乳パック椅子作りを行った。

## 自由学園各部の活動

初等部では、全学年の家庭から牛乳パックを集め、初等部5年生が牛乳パック椅子を製作した。

女子部では、2011年の夏休みを利用し、宮城県石巻市北上町十三浜相川地区の仮設住宅を訪問し、生徒が製作した布巾と子供用のパジャマ、食事研究グループのクッキーを配布した。また相川保育所でのお手伝い、北上子育て支援センターでの子供対象の夾けつ染めのうちわ作りとゼリー作りの会を開催した。また、2012年にも、宮城県石巻市北上町十三浜相川地区の仮設住宅集会所に宿泊し、相川運動公園仮設住宅の方との夕食交流会、相川保育園での盆踊り会のお手伝い、子育て支援センターにて「一緒に遊ぼうの会」開催、にっこりサンパークにて仮設住宅訪問、集会所、保育所の掃除などを行った。

男子部では、2011年10月に最高学部生の支援活動に同行し、今後の男子部の支援活動について考えるためにボランティア活動や、盛岡スコール高等学校の視察を行った。また、宮城県仙台市を訪問し、仮設住宅での縁台作りの会と沿岸部の視察なども行った。

また、自由学園において2012年8月6日から11日まで福島サマースクールが行われた。これは原子力発電所事故の影響により屋外で思い切り遊べないという状況の福島の子供たちに、何も気にせず、のびのびと遊び、生活してほしいという思いから、友の会主催で行われた。福島県と栃木県から友の会員22家庭64人の母子が清風寮にて、1週間の共同

生活をし、男子部、女子部、学部の生徒学生もそのお手伝いを行った。

## 友の会、婦人之友社の支援活動

2011年3月22日に、三団体救援本部（以下救援本部という）が発足し、その日から公式に三団体が力を合わせて、被災地に支援を行うようになった。現地の友の会で行った主な支援活動は、各避難所や小学校での炊き出し、各友の会から送られてきた物資の仕分けと積み込み、物資の青空市、仮設住宅での清掃、手仕事とお茶っこの会、子供会、巡回講座（マフラー、体操、家計簿など）、鍋帽子講習、など様々である。

また、現地から遠距離にある友の会は、後方支援として、主に縫物の技術を活かして製作した物資を現地に届け、また各友の会の代表者が、現地に直接足を運んで現地の友の会と協力して支援活動を行っている。

婦人之友社とその愛読者の団体である友の会は、宮城県漁業協同組合北上町十三浜支所の「東日本大震災 十三浜わかめ復活支援サポーター制度」のサポーター募集に関して、『婦人之友』に紹介記事の掲載を行った。すると、予想を超える応募があり、友の会は取りまとめや現地での作業などにも関わって来た。また、『婦人之友』には震災関連の記事、三団体の活動の様子なども継続的に掲載されており、震災を忘れず末長い支援を呼び掛けるというスタンスをとっている。

## 現在の活動の問題点

私たちは、複数回最高学部の支援活動に参加し、それを通じて感じたものや学び得たものがあり、また普段の生活を見直すきっかけにもなった。その中で、今後も支援活動を継続させていくためには以下の3つの問題があるのではないかと考えた。

- 1) 支援活動への参加学生の減少
- 2) 支援活動体制の不備
- 3) 現地の状況やニーズに合った支援活動であるか

## 自由学園の支援活動の歴史

学園は創立直後からさまざまな社会に働きかける活動を行ってきた。「災害に対する支援活動」に絞ってみると、関東大震災、阪神淡路大震災、新潟中越沖地震のそれぞれの震災の際に、救援活動を行った。また、その他にも、函館での大火の際にも、物資の支援を行い、東北大冷害の時には、「東北セツルメント」という救援活動を行っている。1935年に東北の凶作地に対する奉仕を始める時に羽仁もと子は、『婦人之友（1935年2月号）』誌上で「家族日本をつくりましょう」<sup>3</sup>と題する力強い

<sup>3</sup> 『羽仁もと子著作集第20巻 自由・協力・愛』  
婦人之友社

一文を発表し、救済にのぞむ根本的な思いを読者に訴えた。また、キリスト教を信仰するもと子は、「神」から与えられた一人一人の賜物を、自分のためだけではなく、公に役立てることによって、自他共にはじめて本当の生活ができ、そのような思いを以て努めるときにこそ、「神」が私たちと共にあって一緒に働いて下さると語った。これらのもと子の考えは、これまでの自由学園の支援活動、そして現在の東日本大震災における支援活動でも、三団体の活動の基盤となって受け継がれていると感じた。今後の支援活動を考える際にも、私たちは自分たちに出来ること即ち、与えられているものを自分たちのためだけでなく、他者のために役立てられてこそ本当の生活になるのだ、という精神を忘れてはならないと思った。

### 3. 現状分析と考察

支援活動を考えるにあたり重要だと考えたことは、まず被災された方々が、どのような状況にいるのか、どのような支援を必要としているのかを知ることである。そのために、2012年の夏休み期間に現地での聞き取り調査を行った。また、支援する側が、どのような組織体制で、どのような意識を持ち活動をしているのかという意識調査を実施した。

#### 第一回聞き取り調査

##### 【実施日】

2012年8月24日～28日

(岩手県釜石市、大槌町)

2012年8月28日～30日

(宮城県仙台市、石巻市、十三浜など)

##### 【対象者】

盛岡友の会

木村八江子さん、澤田美子さん

大槌町放課後児童クラブ

赤崎尚子先生、道又真希子先生

仙台友の会

高橋かず子さん、佐藤せい子さん、他仙台友の会の方々

宮城県名取市の三浦隆弘さん、仙台市十三浜の佐藤徳義さん・のり子さん、佐藤清吾さん、気仙沼市の小野寺宏美さん、仙台市在住の小山厚子さん(自由学園女子部55回生)、米沢友の会の島津恵理子さん(自由学園女子部55回生)

#### 第二回聞き取り調査

##### 【実施日】

2012年10月26日～30日

##### 【対象者】

盛岡友の会

佐々木三枝子さん、長谷川千晶さん

南関東部の佐藤尚子さん

釜石市にある駒木山不動寺副住職・森脇妙紀さん

結果と考察 以上の聞き取り調査から、

- 1) 支援する側の意識について
- 2) 教育現場から見えてきた子供に対する支援について
- 3) 第一次産業の復興について
- 4) 仮設住宅での暮らしについての4項目に分け、以下にまとめた。

1) 支援する側の意識について 支援する側は、支援を必要とする人がいなくなるまで支援を続けるべきだと改めて感じた。支援は、支援を必要としている人に対することである。したがって、被災された方々を常に思い、どのような支援を必要としているのかを詳しく知り、また察して、自分たちには何が出来るのかをこれからも継続して考えていく必要がある。また、震災を忘れないこと、出会った方々との繋がりをこれからも大切にしていきたい。

2) 教育現場から見えてきた子供に対する支援について

現場で多く聞いたのは、学生の持つ若さや笑顔が子供たちを明るくさせるということだった。また、その子供たちから大人は元気を得る。子供たちにとって、今回の震災は大きなショックやストレスを負うことになった。その中で、子供たちの記憶の中に楽しい記憶を作ることには学生にも出来ることなのではないかと感じた。今後も継続される学部震災支援活動での子供会・学童クラブのお手伝いで、支援する側が率直に感じたことや、現地の方の声を元にどのようなことが活動として有効的か、可能かを考えていきたい。

3) 第一次産業の復興について 第一次産業の復興に欠かせないものは、消費者の産業に関する関心と理解である。消費者である私たちは、マスメディアや世論に流されることなく、冷静に物事を判断し消費生活をしたい。またそうすることが第一次産業の復興にも繋がるということを理解しておきたい。

4) 仮設住宅での暮らしについて 仮設住宅での問題は、お茶っこの会や子供会などを行っていても、そこには年配のご婦人などしか姿

を見せない。年配の男性や、20～40代の男女を見かけることも少ない。今回行った宮城県での聞き取り調査の中で、「仮設住宅では孤独に暮らしている方が多くいるのではないか」という声があった。このように、男性や、ノックをしても出て来られない方への支援が、大きな課題だと言える。阪神淡路大震災においては、震災から約3年後に仮設住宅での孤独死が増加したというデータがある。<sup>4</sup> 東日本大震災においても同様のことが起きるのではないかと心配される。このような方に対し、どのような支援が可能かをこれからも考えていく必要がある。

また、被災から1年以上が経過し、集団仮設住宅の中で各家庭の格差が目立つようになったことが、一部の被災された方の不安を生む原因にもなっている。被災直後は同じような条件のもと仮設住宅で生活をしてきたにも関わらず、新たな場所へ引っ越し人や、仕事を見つけた人、その一方で、移転先や仕事場がまだ見つからない人もいる。このような問題に対し、私たちの行う支援では難しい面もあるが、問題を認識しておくことは、学生にも出来ることであり、支援活動をすると同じくらい重要なことだと感じる。

また、今回の調査を通して、抽象的ではあるが支援活動において「人と人との繋がりが現地の人を大きく支えた」ということがわかった。そして、現地の方々には、「何かして欲しい」という具体的な願いよりも、この震災を「忘れないで欲しい」「見たこと聞いたことを多くの人に、伝えて欲しい」という強い思いを持っていることを知った。

震災直後は炊き出しや生きるために必要不可欠な物資などが求められていたのに対し、現在は、個人の事情が異なり、ニーズが多様化・複雑化してきている。その中で、「人の精神的な部分」に対する支援が大きく求められてきている。それに対してはまず、上記のように「忘れないこと」、そのために「継続すること」そして「多くの人に伝える」ということが私たちに出来ることではないかと考えた。また、現地の方が持っている「自身の力」を活かせるような支援を考える必要がある。「他人の役に立ちたい」という誰にでもある「人としての欲求」が満たされていないために「辛い」という話を伺った。現地の状況が刻々と変わっていく中で、現地の方自身や、支援する側も、皆が手探りの状況であっても、その都度、最適な選択を考えながら前に向かっていくとする姿勢が大切だと感じる。学生も同じように、継続して最適な支援とは何かを考え続けること

が、とても重要であると考えた。以前から支援活動としての自由学園の組織や活動の体制を見直すことが必要であると感じていたが、現地調査を通してその重要性を改めて認識した。

最高学部としてより良い持続的な支援を考え、行っていくために、まずは自分たちの足元を固めることが、今私たちのやるべきこと、出来ることではないかと考えた。「足元を固める」という意味は、支援をする側である学園（特に最高学部）の組織体制・意識を改めて見直し、問題点については改善する、という意味である。そのために、現在の支援活動の問題点、組織の在り方などを、詳しく調査をする必要があると考え、学生アンケートとSKCへの聞き取り調査を行った。

#### 学生アンケート調査

学生の意見や考えを聞くことを目的に、学生アンケート調査を二回実施した。一回目は最高学部2年生40名を対象とし、二回目は最高学部生全員147名を対象とし行った。回答率はどちらも70%だった。

このアンケートより、現在の学部の支援活動にいくつか問題点があるが、その問題点に対して改善案を持つ人は少なく、どうしたらよいかわからない人が多いことがわかった。一方で、支援活動に参加した、していないに関わらず、半数以上の学生が、支援活動を継続すべきだと思っていることや、現在の支援活動の在り方について、多くの学生が意見や思いを持っていることがわかった。

その学生の思いが内に留まることなく、現地の方に届けられるように、また、意見をすぐに反映させることが出来るように、体制を見直す必要があることを感じた。

現在の状況は、支援活動に学生の意見が反映されにくい環境だと言える。その原因の1つとして、学生がどこに意見を発信すればよいかわからないからではないかと考えた。現在、支援活動の中心となっている組織は、震災支援グループとSKCである。しかし、アンケート結果から、支援活動の中心となるそれらの組織がどのような組織なのか、また何をしているのかわからないという意見があったように、震災支援グループとSKCは学生の中であまり認識されていない現状がある。

#### SKCアンケート調査

これまでの問題点を改善するための一つの手段として、SKCという組織をより知ることが大切だと考え、SKCに関わる女子部・男子部・学部の教師4名にアンケート調査を行った。

<sup>4</sup> 神戸新聞 NEXT インターネットニュースより  
<http://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/03/199705/0005477175.shtml>

### 全てのアンケート調査からの考察

学生と教師にアンケート調査を行ったが、SKCという組織は学生側からの認知度が低く、またSKCが教職員のみで運営されているため、「(SKCについて)よくわからない」「学生の意見を言う場がない」と思っているが、教師側は生徒・学生の意見や考え、そして自主性を求めていることがわかった。

このことから、生徒・学生とSKCの教職員との間の意思疎通が円滑に行われていない現状が浮かび上がった。SKCは周囲がその組織を知ることが出来るように工夫をする必要があり、その教職員の思いを学生が知ることが出来たら、意見交換や考えなど共有することが出来るのではないかと考えた。

### 他の学生団体の活動

最高学部への支援活動を振り返り、問題点を考える中で、今後もより良い支援活動を行っていくためには学園の支援活動のみを対象とするのではなく、3.11に対して私たちと同世代である他の大学生の取り組みについても知り、そこから学ぶことも有益だと考えた。そこで、そのような取り組みについての調査(岩手県立大学、明治学院大学)と、実際に他団体(Youth for 3.11 クラッシュジャパン)の活動に参加したことからの、今後の最高学部への支援活動に活かせる要素を述べる。

他大学の活動との比較では、活動の積み重ねという点では、学園も創立当初から災害への支援活動をしてきているが、過去の災害の支援活動が単体として完結してしまっているために連続性を持っていないと感じる。一つ一つの活動の記録を積み重ね、連続性を持たせながら残していく必要があると考えた。これは現在継続中の3.11への支援活動を単体で終わらせないということ、日々の支援活動がその大切な積み重ねの一つでありつながっているのだと認識することにもつながるのではないかと考えている。また、一人一人の思いに目を向け、それを共有することも必要である。自分の感じたことを言葉にすることで自分自身の振り返りになり、また互いに共有することによって、更に発展した活動へ繋がるのではないかと考えている。最高学部への支援活動においても記録とは別に、思ったこと感じたことなど一人一人の思いを残すということをもっと良いのではないかと考えた。その他にも、SNSで日報として発信することや、活動の流れの定型化などがあげられる。

しかし一方、他団体の活動を知る中で、自由学園としての強みも見えて来た。それは、創立者の理念や精神が現在も明確に受け継がれていること、幼稚

園から大学までの一貫校であることや小規模な学校であること、自由学園の生活を送る中で、自然に身についた体力や知識があり、協調性が身に付いていること。また、自由学園の支援活動の環境が整っていることが挙げられる。

他団体の活動も参考にしながら、学園らしい支援活動というものが、生まれていくことを望む。

### 4. 提案 以上の現状調査・分析から明らかになってきた現

在の支援活動の問題点に対し、その改善のために以下の提案を行った。ここまでに問題点として挙げられたものは、

- 1) 学内の組織について
- 2) 活動の記録体制について
- 3) 生徒・学生の自主性についてである。それらの改善に向けて、それぞれ次のような提案を行った。

#### 1)組織について

SKCと学生が繋がりを持つことが、まず必要だと考えられる。そのためには、意見や活動内容など互いに知り合うことが重要である。また、現地調査を行って感じた「足元を固める必要がある」というところからも、まずは組織を見直すために以下の項目を挙げた。

- SKCという団体がどのような目的でどのような活動をしている団体なのか、生徒・学生へSKCとしての方向性を明示する
- 教師・生徒・学生が同時に集まる合同礼拝などの場にて、学園全体としての今後の震災支援活動について、どのように継続させる方針であるのかを報告する

これらのことによって、生徒がSKCという組織の存在、意義について知るきっかけとなると共に、学園内での支援活動に対する意識・認識が統一されるのではないかと考えた。

具体的な提案は以下の通りである。

- SKCが発行している掲示板Newsを教師対象に掲示するのではなく、生徒・学生も普段から見ることが出来る場所、目につきやすい場所に掲示する
- 同時に、SKCの存在について、各部での具体的な支援活動について全体の集まり(合同礼拝など)で報告をし、会議での決定事項や学園内でのどのような支援活動が行われているのかを各部互いに認識する

SKCの掲示板Newsを掲示する場所については、学生掲示板や、階段の壁、食堂など学生が普段よく目にする事が出来る場所が好ましいと考えた。

では、SKCが学生の意見を取り入れるためにはどのようにしたら良いのだろうか。

それは生徒・学生の自主性の問題のみならず、SKCの認知度が低いという問題点への解決にもつながってくると考えられる。

具体的な提案は以下の通りである。

- ・支援グループのリーダーがSKCの会議に参加し、学生からの意見を伝え、またリーダーはその会議の内容を学生に伝える
- ・支援グループに学生の意見を集めるために、支援グループのメンバーを各学年から一人ずつ出す

2点目の提案は、各学年に支援グループのメンバーがいることで組の時間などで意見も出やすくなると考えたからである。違う学年の人の意見を聞く事が出来るという面でも良いと思う。また他学年とのつながりも強化させられるメリットもある。

これらを実行することで、組織の強化にもつながり、それが学生・生徒の自主性にも繋がると考えた。学生と組織の間に壁がなくなれば、より良い活動が出来るのではないだろうか。

活動内容を周知するために、以下の具体的な提案を行った。

- ・支援ブースの作成

これは、学生が組織や活動を知るという目的のみならず、聞き取り調査により明確になった現地のニーズ「忘れないこと」につながることも思う。さらに支援活動について、皆が考え・知るきっかけともなって、最高学部全体を巻き込んだ活動に繋がると考えた。

具体的には、学部食堂の一角に支援ブースを設け、活動内容を記したポスターや、SKC 掲示板 News をファイリングしたもの、文書・写真の記録、その他支援活動と震災に関係するものを置くということを示した。尚、このブースの管理については支援グループがすることが望ましいと考える。

## 2)記録について

私たちが参加した2012年8月の支援活動から、引き継ぎ帳の作成、記録フォーマットの作成を行った。しかし、現在の状況では、記録の提出日が決まっていないことや、引き継ぎ帳がきちんと管理され

ていない。そこで、記録体制の更なる強化が必要であると考えた。

- ・記録の提出日を明確に伝える
- ・記録の管理、また引き継ぎ帳の管理の責任者を明確にする
- ・支援ブースに記録を置き、誰でも閲覧出来るようにする

具体的には、記録についても支援グループが管理することが望ましい。記録管理の責任者は、図書館との連携も怠らないようにするべきである。なお、記録については図書館に保存するのみでなく、支援ブースに置くことによって、皆がいつでも手に取って試みる事の出来る仕組みを作ったら良いと思う。

また、他団体の活動（Youth for3.11）の実際の活動の中に、支援の前に必ず研修期間があること、また終わった後は反省会をもち、必ず“一人一人”の意見を聞くことということがあった。そのことは、学園にも活かせる部分があると感じる。そこで、支援活動に参加した人に、参加後すぐに感想文（報告書）を書いてもらうことを提案する。そのことで、形式的な記録では伝えることの出来ない一人一人の思いを記録に残すことができ、また常に変化していく現地の状況と照らし合わせて学生が何を感じたのか知ることが出来ると思った。

## 3) 生徒・学生の自主性について 生徒・学生の自主性が不足しているという問題点

は学生・教職員の双方から挙がったが、そもそも自主性というものの自体が具体的に測れない気持ちの問題であることから、「〇〇すれば、自主性が△△だけ強まる」という即効性のある提案が難しい問題である。しかし、学生アンケート結果から3.11に対する関心や何かしたいという気持ちを多くの学生が持っていることがわかった。その気持ちやアイデアを出し、それが実際に支援活動に反映させられるという経験をする事が、自主性を持った活動につながるのではないかと考えた。そのために、学生の内にある意見や考えを反映させられる仕組み作りが必要である。今回私たちが行った全ての提案がここにもつながるのではないかと考えた。

また、提案を実現化するために、まずは今後の方向性や、活動自体の目的をはっきりさせるべきだと考え、支援グループとのディスカッションを行った。その中で、来年度のリーダーがはっきりと決まり、そのリーダーを中心に、来年度の活動が具体的に考えられた。

## 5. おわりに

私たちは、一年間を通して「東日本大震災を考える-自由学園における最高学部の支援活動を持続可能にするためには-」というテーマで卒業勉強を進めてきた。

目的1の「学生・生徒が主体性」をもつということに関しては、組織（SKC 教師）側と学生側の意思の疎通が、学生側の自主制・主体性につながると考え、提案は、活動に対する提案というよりも、組織の見直しに対する提案を行った。

また、目的2の「記録を強化させる」については、私たちが参加した第15陣(2012年8月)から「引き継ぎ帳」を作ることや、フォーマットの作成をし、実行し更なる強化を図った。資料室と連携を取りながら、という点に関しては、支援グループに任せる形の提案となってしまうため、不足部分があるように感じる。可能な限り実行することは出来たが、時間の制約上、支援グループへこの卒業勉強を引き継ぐ形となった。

目的3の「復興に関わっていく際に必要な知識を得ること」については、一年間の取り組みを通して常に考え、学園における支援活動の歴史調査などから得た創立者の思想を含め、最高学部支援活動を初めとする3.11に関しての知識を様々な機会から学び得ることが出来た。現地の方々からお話を伺った中で、「忘れないで欲しい」「伝えて欲しい」という強い思いがあった。この一年間で学んだ知識を、知識で終わらせるのではなく、今後はそれを活かし、行動に移していくことが、これからの私たちの使命であると強く感じた。

また目的とは別に、私たちは、これまでに行ってきた計3回の中間報告会や、学内を対象としたアンケート調査、震災支援グループとのディスカッションなどを通して、多くの人に「東日本大震災について」、またその災害に対して「自分たちには何が出来るのか」を改めて考えるきっかけになって欲しいと願ってきた。

一人一人の思いや考えは、目に見えるものではない。それを内にとどめるのではなく、行動に表していくことが大切である。

この卒業勉強が、3.11を忘れないことと、自分たちには何が出来るかを考えるきっかけ、また支援グループの今後の活動の発展に繋がることを期待する。

#### 資料編一覧

資料1：学園新聞に掲載された支援活動リスト

資料2：婦人之友に掲載された支援活動関連記事リスト

資料3：掲示板ニュースに掲載された支援活動リスト

資料4：三団体の支援活動記録

資料5：最高学部支援活動参加者リストと活動内容  
資料6：学生アンケート用紙(第一回) 資料7：学生アンケート・集計結果(第一回) 資料8：学生アンケート用紙(第二回) 資料9：学生アンケート・集計結果(第二回)

資料10：SKC へのアンケート

資料11：續木光氏へのインタビュー

資料12：2012年度卒業勉強の現地聞き取り記録 資料13：二年課程2年2012年度活動記録

資料14：第1回・第2回現地調査地区

資料15：これまでの支援活動の写真

資料16：牛乳パック椅子の作り方 資料17：新入学児童用袋物の作り方

資料18：星住りべか先生による

「地震のメカニズム」についての授業

資料19：他団体による活動の調査とその参加記録

資料20：震災・地震に関する自由学園羽仁先生記念図書館の蔵書一覧

#### 参考文献・参考資料

##### 【一般書籍】

『東日本大震災全記録 一被災地からの報告』2011 河北新報社

『特別報道写真集：東日本大震災：2011.3.11 1カ月の全記録』2011 上毛新聞社事業局出版部

『闘う日本 東日本大震災 1カ月の全記録』2011 産経新聞出版

『報道写真全記録 2011.3.11-4.11 東日本大震災』朝日新聞出版

『人間形成と社会—学校・地域・職業 第Ⅱ期 地域と学校による人間形成 第5巻 都市の住民の地域作り』クレス出版

##### 【自由学園関係書籍】

『羽仁もと子著作集 第20巻 自由・協力・愛』婦人之友社

『農村生活合理化運動 東北セツルメントの記録』全国友の会中央部

『自由学園 80年小史』自由学園出版局

『野の花-自由学園生活学校展 記録を中心に-』自由学園卒業生会

『自由学園の歴史Ⅰ 雑司ヶ谷時代』(1985) 婦人之友社

『よみがえれ明日館スピリット F・L・ライトと自由学園』羽仁 結 ネット武蔵野

『婦人之友』婦人之友社

##### 【自由学園関係出版資料】

『掲示板 News 震災救援活動ニュース』学校法人自

由学園 震災救援活動センター

『学園新聞』自由学園出版局

『友の新聞』全国友の会 友の新聞発行所

『友の新聞(第648号)2011年4月号』全国友の会 友の新聞発行所

『友の新聞(第651号)2011年7・8月号』全国友の会 友の新聞発行所

『友の新聞(第661号)2012年6月号』全国友の会 友の新聞発行所

『友の新聞(第664号)2012年9月号』全国友の会 友の新聞発行所